

都市の裏側の私と家

“都市の裏側には私だけの異世界が存在するのだ”
これはマチナカにひょっこりと顔を出す「くぼみ」とその「奥」の家。



◆都市の裏側を知る私

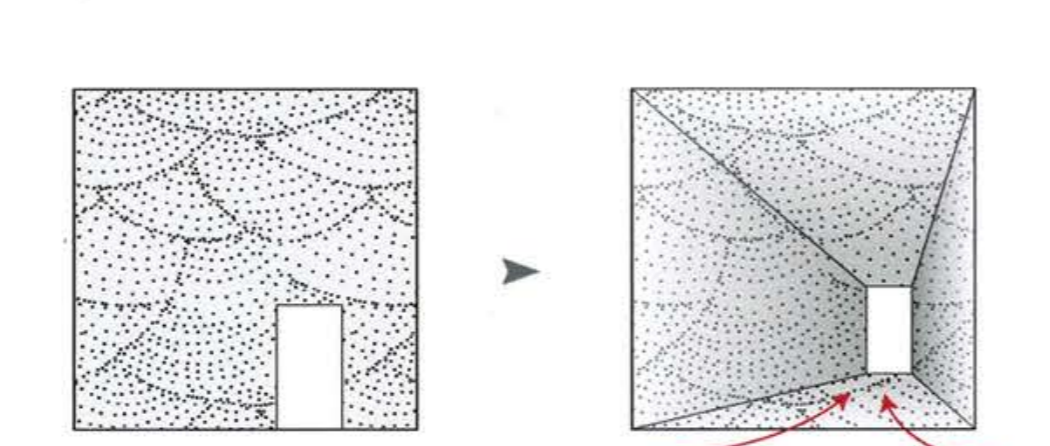
“都市は日常を飲み込んだ。様々なヒト、モノが行き交い、膨れ上がった都市空間は、常に成長し動き続けている。しかしそんな目まぐるしい都市空間にもまるで時間が止まったような異世界が存在するのだ。そして、そこは私しか知らない場所なのだ。”

都市に住む快樂とは、そんな「自分だけの特別な居場所」を都市空間に「見出せること」だと感じた。それはただ外部に対して閉ざすことではなく、都市に開くことと、都市を閉ざすことの双方を跨ぐことでうまれる関係性だと考える。

私はそんな都市の表と裏を移り変わる家を提案する。

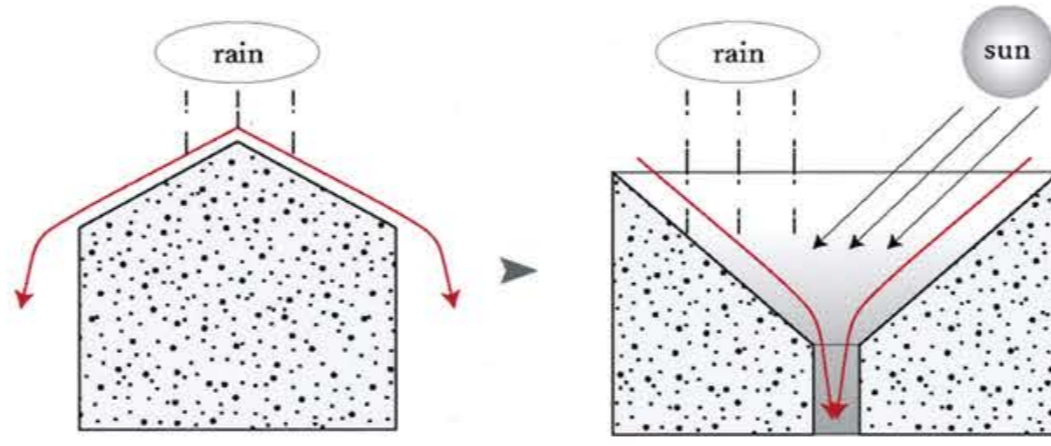


◆都市を受け入れる間口



間口最大限にとった開口部から壁、屋根が徐々に狭まり、一つの扉のスケールに変化する。都市から家へとスケールで空間を体験させ、徐々に「私」の家へと繋がるのである。間口を空間として広げることで、地域の受け皿にもなる。

◆私だけの空

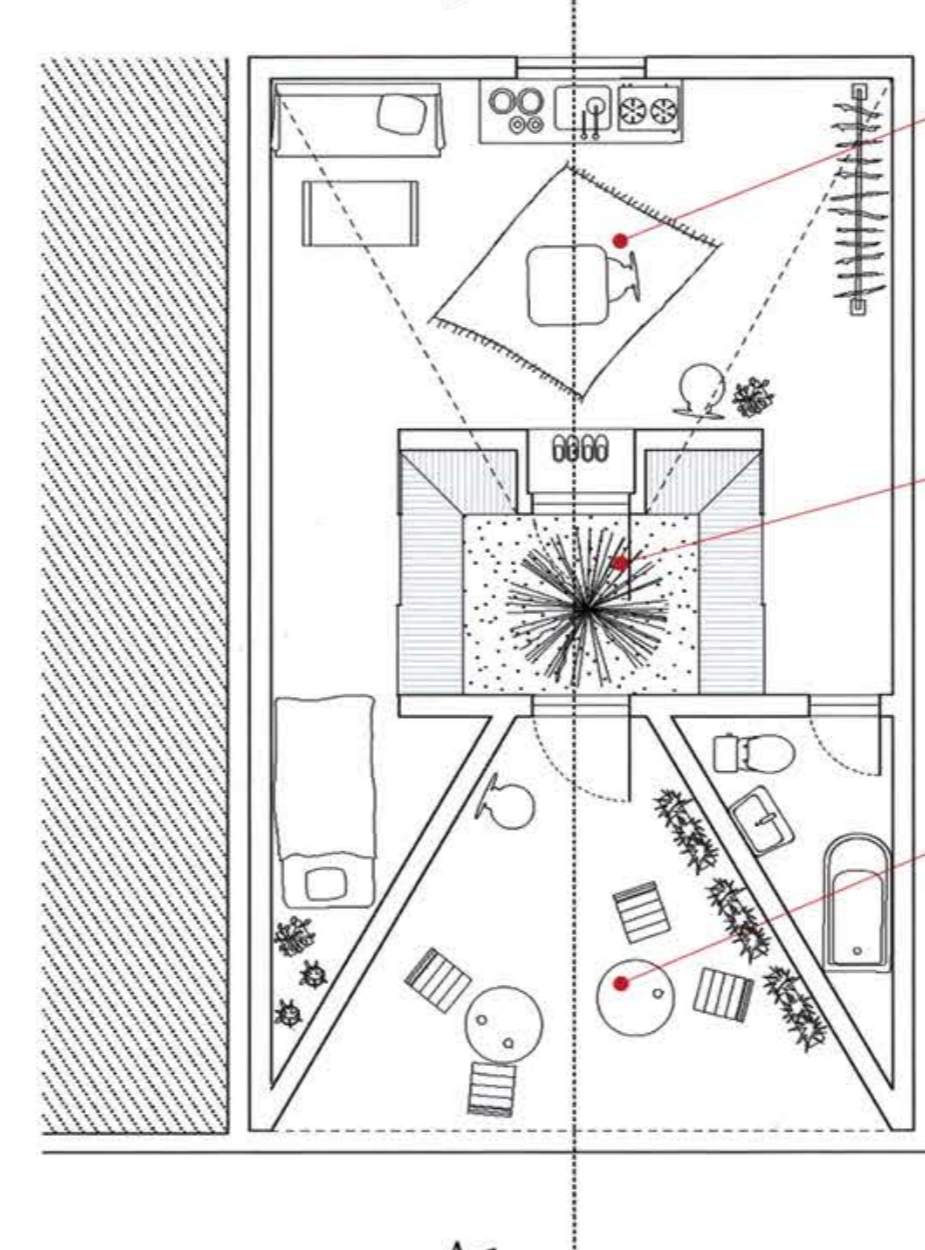


屋根面を凹型にすることで、空から享受する外部環境を内側へと取り入れる。屋根に降る雨は全て、庭へと流れ、光は最大限に確保する。都市から閉ざされた内部空間は、環境と密接に関わりをもつことで、時間の流れや、自然の変化を感じることができる。

◆非日常性を与える

【扉】 扉は内外を隔てるだけでなく、私と都市、双方を結ぶ役割も果たす。

【木】 この家は一本の木の木漏れ日が内部を照らし、そしてプランの中心を捉えている。



庭を囲むワンルーム空間
屋根の傾きと庭の木によって強い中心性をもつワンルーム。庭の環境に内部空間は呼応し、四季の変化と屋根の傾きで、空間は多様に移り変わる。

中間的な庭
アプローチの扉の先は「外」である。都市の私と家の熱の切り替わる場であり、ここは中庭でもあり「玄関」でもある。

受け皿となるアプローチ空間
アプローチのくぼみは他者と関わりをもてるスペースでもある。井戸端交談やちょっとしたカフェのつもりになる。

平面図 S=1:100



A-A' 断面図 S=1:100

